

対談

東北の未来
創造にむけて



産業技術総合研究所 理事長

東北活性化研究センター 会長

中鉢 良治

海輪 誠

東北の未来創造にむけて

これからの先が見えない時代、そもそも東北の価値、そして東北の果たすべき役割とは何でしょうか。東北の未来のあり方を探るべく、今回は東北活性化研究センターの海輪誠会長に産総研の中鉢良治理事長と対談いただきました。「東京から東北へ来た」海輪会長と「東北から東京へ行った」中鉢理事長。そんな逆の経歴を辿ったお二人の東北観とは如何に。

モデレーター：「宮城の新聞」大草 芳江（有限会社 FIELD AND NETWORK）
対談のフルバージョンを「宮城の新聞」(<http://shinbun.fan-miyagi.jp>) でご覧頂けます

中鉢 私は宮城県の鳴子町で生まれ育ち、高校進学後はソニー入社後しばらくの間まで仙台に住んでいたため、東北に対して誇りを持っています。しかし歴史的にも現状でも、東北はどれも後進地域みたいになっています。だんだん自分が成長して客観的に東北を見れば見るほど、生まれ故郷というバイアスのかかった時と、客観視した時の東北観は違うのです。

東北は、江戸時代には米を中心とした農水産品を、明治時代には兵隊を、近代化とともに金の卵や出稼ぎ等、労働力を首都圏へ送ってきました。そして現在では大量の電気を送っています。つまり江戸を中心とした首都圏が近代化して発展するための要件を、実は、東北が整えてきたわけです。

その共通項は東京が地方の生産年齢人口を集めて一極集中で発展していったことです。一方、今日の新興国で見られるような人口ボーナスの逆現象として、生産年齢人口の極端な減少を先駆けて経験し衰退していく東北の姿があります。基本的にはそんな構図の中でどうしたら東北がもう一度復興できるかが今テーマになっているのではないのでしょうか。ですから、海輪会長のように東京から東北に来られる流れが良いわけですね。

海輪 中鉢理事長が色々な問題認識を仰いましたが、共通の感覚を持っていらっしゃると思います。私は東京から東北へ来たのに、同じ感覚を持つということは、大体見方は合っている、ということではないでしょうか。

私は東京の北千住という奥州街道の宿場で、靴職人の男三人兄弟の次男として生まれました。大学進学のために仙台に来てから、この土地で暮らし続けよう決めました。積極的に何かをしようとして東北に来たわけではありませんが、以来、自分は東北の人間であるという意識でやってきました。

東北の魅力は、東北人共通の誠実で謙虚な人柄だと思います。一方で謙虚さ故、発信力が弱いのが東北人の弱点ですね。また、中央に頼り過ぎて自分たちで何かを興そうとする気持ちが弱いのも欠点だと思います。もうひとつは、江戸時代の藩政の影響が残るのかもしれませんが、隣県同士の仲がとても良いというわけではなく、お互いに助け合おうという意識がやや少ないと感じます。そのような点を踏まえた上で、今後どのようにしていくかという議論につなげる必要があるのではないのでしょうか。





東北の特殊さ、どう捉える

中鉢 私はもろに東北人ですから、「お前の欠点だ」と言われているかのように、ひしひしと感じます。

全くの同意見に補強的に付け加えますと、東北の良さは人々が誠実なところだと思います。その誠実さが上手く表現できていないのではないのでしょうか。私は人間の全ての徳の中で一番大切なことは、誠実さだと思います。それを感じ取るから、これは極めて誇りだと思います。

「東北人はシャイ」と言うこともありますが、スタンダードというものに対する自信がないのです。東北文化は非常にローカライズされた、標準化されていないものなのです。口には出しませんが、言葉も含めて、どうしても「特殊」という意識が東北人にはあるのです。

ですから、今までは何を聞かれても黙っていました。それはずっと長い間、東北が中央に対して従属関係にあったからだと思います。「白河以北一山百文」の感覚を自他ともに許しているから、標準化されないことに対する恥ずかしさがある。それで異文化への抵抗感があるのでしょうか。だから内向きになるのではないのでしょうか。東北人である私自身の気持ちを胸に手を当てて考えると、そう感じますね。

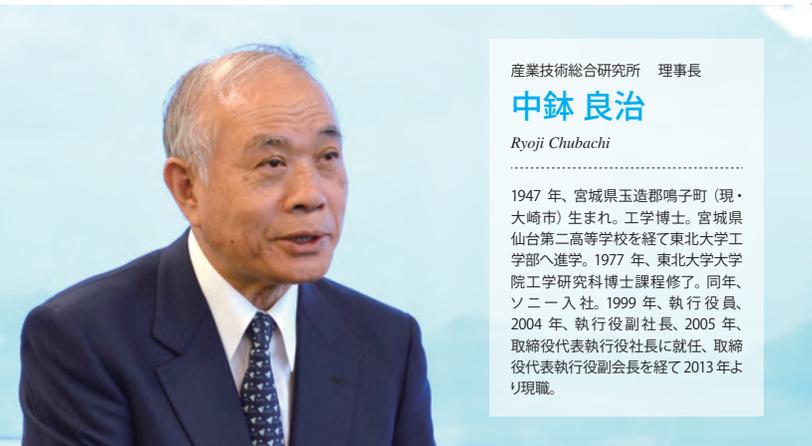
海輪 同感です。東日本大震災では、東京電力福島第一原子力発電所で事故が発生しました。これは「首都圏 vs 東北」という意味でかなり象徴的なことだったと思うのです。理事長も仰る通り、東北は首都圏にヒト・モノ・カネも、エネルギーも供給してきました。歴史的に見ても、東北は蝦夷征伐に始まり、幕末には会津藩が征伐される時に、奥羽越列藩同盟を組んで対抗しました。それこそ誠実さの表れだったと思うのです。それを思いますと、東北の人はなぜもうちょっと怒らないの、と感じたわけです。

私どもの電力事業の歴史で申しますと、電気事業は最初、各地の自治体やお金持ちによるベンチャー事業で、それがだんだん統合されていきました。そんな中、度重なる冷害や飢饉で疲弊する東北地方を救済するために電力事業で経済振興を図ろうと設立されたのが東北振興電力株式会社です。それが戦時中に国策会社の日本発送電株式会社に社化され、戦後は GHQ の指令で全国 9 地域に 9 電力会社の体制がつくられました。全国 9 地域体制をつくったのは、地方分権でエネルギーを支える会社をつくろう、という目的があったのです。

そのような歴史的経緯も踏まえると、私は社内でも申し上げているのですが、東北地方は「特殊」な歴史を持つ地域ですから、その意味では一般的な電力会社や地方としてでなく、地域というものを特に意識した対応をしていく必要があると思います。

ただ、理事長も仰ったように、東北の「特殊」さがいつもコンプレックスになっています。逆に「特殊」さを前向きに変えていかなければいけないと思うのです。今まで自分たちは価値がないと思ったものは、実は、よそから見ると価値があるのだと。これまでの「ずれ」をハンディキャップとしてではなく、前向きに捉えるべきではないのでしょうか。

また、今回の復興予算に全面的に頼るようではだめで、次の時代の東北が自立して地域経済もまわる社会にするために何をすべきかは、早々に手掛ける必要がある問題です。



東北は連携できるのか

中鉢 仰る通りですね。会長が先程仰った「お互いに助け合おうという意識が少ない」点も、大変当たっていると思います。他の東北の県と仲良くするくらいなら中央や世界に近づいて隣を出し抜こうとする気質が、ある種の後進性の現れかもしれません。今までは世界に通用する人材の東北からの輩出を目指してきましたが、これからの時代はむしろ隣と連携できる人材が重要になると思います。

海輪 その象徴的な出来事がありました。例をあげますと各県は震災前から、海外への観光・物産 PR 活動を個別に行っていました。台湾にリンゴを売る活動は青森県が非常に成功しており、三村知事は台湾で「リンゴ知事」として有名です。ところが、例えば秋田や山形が台湾へリンゴを売りに行くと、台湾の人からすれば「この前来たばかりなのに、また来たの?」という感じです。

じゃあ、皆で一緒に行ったらいいじゃないかということで、やっと 2016 年 8 月末、東北各県知事らが揃って台湾へ観光 PR に行こうと、東北観光推進機構等と一緒に代表団を組んだのです。その結果、相手側の受けが非常に良かったですね。一県単独なら会えないような台湾の蔡総統とも会えましたし、各マスコミからの取り上げられ方も全く違いました。連携による効果は非常に大きかったのです。ですから今後これをもう少し観光以外にも広げたいですね。

中鉢 それは歴史的な出来事ですね。ひと時、地方分権の話がありましたが、東北は絶対にまともにならないだろうと言われた筆頭で、逆に一番まとまりやすいのは九州ではないかと言われていました。東北には特殊論がそれぞれにあり、特に仙台市は突出した規模を持つので、仙台市を持つ宮城県や隣県の思惑もあって、なかなか連携が取りにくいのです。

海輪 さらにインフラの例で言えば、昨年 7 月に仙台空港が民営化され、「仙台は栄えて、まわりは疲弊する」という意識を、宮城県以外の皆さんが少なからず持っています。そんな中、外国から来るお客さんはまず「東北ってどこにあるの?」から始まります。「東京の北、北海道の南」くらいしか認識されていない中で、山形だ、秋田だ、青森だと言ってもだめで、連携してプロモーションしなければだめでしょう、ということになるわけです。

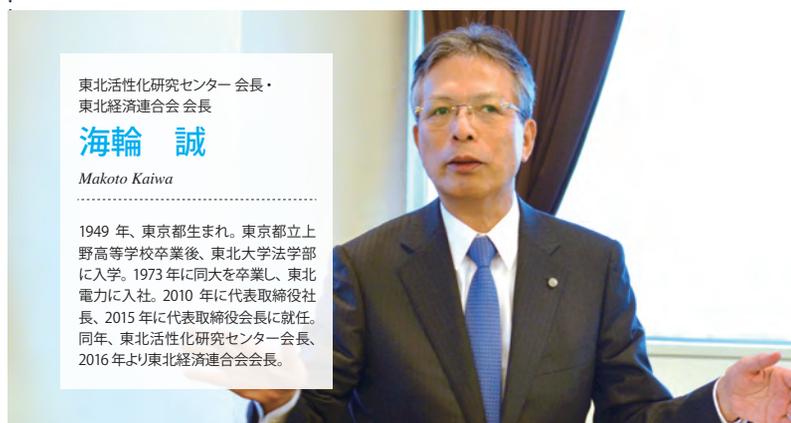
中鉢 よくわかりますよ。今日は産総研と東北活性化研究

センターさんが共同で、「オンリーワン企業 - 次世代産業技術マッチングフェスタ(本誌 p.5 参照)」を開催しています。このような機会を宮城県だけでなく、東北 6 県すべての公設試験所と一緒に連携して持ったのは、産総研 130 年、東北センター 50 年の歴史の中で、実は初めてのことです。

東北として連携する動きがようやく出てきた。この時期がなぜ今来たかと言えば、「このままは続かない」と、我々も含めて、皆が気づいたからだと思います。

海輪 本日開催されたこのフェスタも、ひとつの成功事例ですよ。連携することで自分の価値を非常に高めるということを実感できる場づくりが大切だと思います。

私が会長を務める東北経済連合会(東経連)では、新たに策定した長期ビジョンの柱のひとつに「広域連携の場づくり」を掲げています。これは自治体がなかなか先導できないことですので、県境がない民間でやるしかないと。ビジネスを通じた連携ができれば、その上に東北の自治体に加わる場をつくれると考えています。



中央との対等な付き合い方

海輪 もうひとつ、東北が挑戦していけばチャンスがあると思っているのが、IoT や AI 等の活用です。これは産業界のみならず、地域社会を維持していく面でも大切だと思います。「地方消滅」と言われていますが、このままいけば、田舎の町や農村どころか、皆、消滅してしまうわけで、それが良いことかと言えば、決してそうではないでしょう。

東北の魅力は中核的な都市があちこちにあり、それぞれ独自の文化をもって活動していることだと思いますし、それを維持しなければならないと思います。ですから限界集落から人を引き上げて都会に押し込めてしまうような議論はやや極論で、逆に、限界集落のような地域でもビジネスができる環境を整える方が大切だと思います。

中鉢 それを少し異なる観点からコメントしますと、東京と地方は全くの別物です。象徴的な例で言えば、時間の流れ方が感覚的に違うので、時計の進め方も違うようにしなければいけないと思っています。

東京の1時間と仙台の1時間の感覚は違います。東京では5分毎に電車が来るのに我先にと皆駆け込んで電車に乗り込みます。一方そんな混雑は仙石線にはありません。なぜ東京ではあんなに急がないと生活しづらいのか。それは、分業化によって効率を良くしているからですが、反面、それは一人では生きづらい構造であることを意味します。このため、東京では何ををするにもお金が必要です。私の生まれ育った田舎だと、財布を開く場面など週に1、2回もなく、それで普通に生きていけるわけです。地方がなにも東京の真似をする必要はないと思うのです。

例えば、ライオンとシマウマの弱肉強食の共生関係があります。ライオンが強いからシマウマがいなくなるかといえばそうではなく、シマウマがいなくなるとライオンもいなくなる。「地方消滅」と言いますが、地方がなくなれば東京は死んでしまうと思います。地方を犠牲にして生きるという、歪みのある片務的な関係は是正しなければいけません。

では、そのためにはどうしたらいいか。地方には地方の文化があるわけではないですか。保護主義的になるわけではなく、地方独自のものをつくり、それを前提に東京と自由に往き来するのです。「ここに土着していける」というクローズドな面と、外と交流していくオープンな面の両方のバランスをもって、中央と双務的關係が築けなければ、健全ではないと思うのです。

つまり、地方と中央の対等な付き合い方があるのではないのでしょうか。それは必ずしも地方が中央化することでも、中央が地方化することでもない。地方には、地方の役割があるとと思うのです。

海輪 私の家内は秋田県の横手市出身で、彼女と結婚する前、横手に何回か行き、地方都市独自の良さを感じました。ところが十数年後には、商店街がバタバタ閉店して今やゴーストタウンです。なぜかと言えば、バイパスができて、大型ショッピングモールができました。あの時、東京のスタンダードを地方に持ち込んでしまったのです。効率的で安く大量に物が入るといいでしょう、という価値観が席卷してしまっただけで、地域は壊れてしまう。むしろ、そこで失ったものに、大切なものがあるでしょう。これをひとつの価値観として再認識する必要があります。

東経連も将来ビジョンを策定する際、そこからまず議論しようとして「なぜ東北に住むことが良いことか？」から考えました。すると理事長も仰る通り、職住近接で「暮らしやすい」。

「暮らしやすい」とはコストも最小で暮らせるということですから、収入が減ったって、自由に使えるお金は、逆に増える可能性があります。次に人口減少の問題は、高齢者が増え、稼げる人が減るといふ人口構成の問題です。そこに着目し、若い人が住める環境にもっと力を入れていく必要があります。そこで「暮らしやすく、やりがいを実感できる地域社会」をイメージし、その実現のために何をすべきか考えました。

そのためには、東京と同じやり方ではない「稼ぐ力」が必要です。それに理事長も仰る通り、交流しなければシュリンクしてしまいますから、中央や他地域と交流しながら活性化していくことが大切という意識も必要です。

そのような意味で仙台はトップランナーとして、これからも東北の中核都市として発展し続けるポテンシャルが非常に高いですね。先程もお話した通り、隣県同士の問題は、仙台ばかりが栄えていることが理由だと思うのです。しかし逆に言えば、東北全体を考えた時、仙台でさえも栄えなければ大変なことになる、という言い方もあるわけです。仙台で得た利益が他の東北地方に広がる構造ができれば、一番よいと思うのです。まず、それを目指すマインドを高めなければ、東北同士で足の引っ張り合いばかりになってしまいますね。

閉塞感を打ち破るのは「人」

中鉢 その閉塞感を打ち破るような活動は、基本的にはやはり「人」だと私は思うのです。

幾つかあるネットワークのうち私が思い付くのは、地域の持つ同窓組織や先輩・後輩の縦系列のつながりと、地域コミュニティにおける駅と学校の役割、このふたつが重要という予感がしているのですよ。

そして、行動範囲を少しずつ広げ、今まで知らなかった人とも付き合えることが大切だと思います。そのためには言葉や色々なユニバーサルな能力も必要になります。それによってまた自己増殖して広がっていくと思います。

私も海外に赴任したりと、色々なことをしました。自分の指向性からしたら自ら海外には行けなかったでしょうが、後ろから背中を押す人がいたから行けました。人間は本質的には保守的なので、何かきっかけが必要だと思います。

海輪 ですから仕掛けとして今回のフェスタのような場をつくり「会って見たらよかった」ということが成功事例になり伝播していくようなアプローチになりますね。

あとは、独自の「幸福度調査」のようなものを実施する

のもよいと考えています。本当は東北は幸福なんだと自分たちの価値を見直すこと、人から評価してもらうことが必要ではないでしょうか。

もうひとつは、震災後、起業する若い方が多いです。最近の若い経営者はノウハウを囲い込もうとしないどころか、逆にどんどん教えて別の地域に広げていこうという方が多いのです。そのような若い方には非常に期待したいですし、それを全面的に展開するための情報発信やつなげるお手伝いを、我々もしたいと考えています。

中鉢 産総研の研究者はシーズをつくり、地域にはニーズがありますが、放っておくだけでは何も起きません。化学反応に例えれば反応を促進させる触媒のようなものとして、我々産総研も「イノベーションコーディネータ」という専門職をつくりました。企業や研究機関の出身者のほか全国の公設試験所の方にも併任いただいて、現在 160 人体制で全国の企業に「こんな技術がありますよ」と訪問しています。ところが、ある企業に行った時のこと、とても怪しまれたことがあります。「あなた方はなぜ一所懸命やるのですか？ 動機がわからないから、そんなうまい話は信用できない」と。そんな疑問に対しては「産総研は研究だけやって評価

されるところではないのです。皆様のお役に立ててなんぼのもの。これが我々の評価基準です」と説明しています。

我々は皆さんから税金という形で、前金で研究投資していただいています。公的機関と連携するのは新しい姿だと思います。東北の企業に生産性を上げる新方式を導入すれば、もの見事に効果を示すと思います。それがなぜ今まで放っておかれたかと言えば、ご縁がなかったから。その意味で、東北は伸びしろがまだまだ大きいと思っています。

東北人として、人も羨むような成功例を故郷がつつけて広めてほしいと、心から願っています。 (談)



平成 29 年 1 月 13 日「オンリーワン企業 - 次世代産業技術マッチングフェスタ」会場 TKP ガーデンシティ仙台にて

開催報告

REPORT

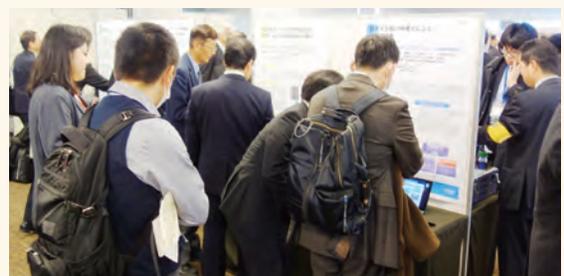
「オンリーワン企業 - 次世代産業技術マッチングフェスタ」を開催しました

産総研東北センターと東北活性化研究センター（活性研）は、平成 29 年 1 月 13 日に「オンリーワン企業 - 次世代産業技術マッチングフェスタ」を TKP ガーデンシティ仙台で開催しました。278 名が参加し、うち企業関係者は 129 名でした。本イベントは、産総研技術シーズを研究者自らがポスターで紹介し、技術の橋渡しを目指すテクノブリッジ活動の一環です。

活性研では、ユニークな技術を持つ東北圏オンリーワン企業 123 社を選出し、HP などで紹介しています。オンリーワン企業をはじめとした新潟県を含む東北の企業に、産総研の技術シーズを活用し、事業活性化につなげてもらう狙いで、今回の共同開催に至りました。

フェスタ前半のシンポジウムにおいて、産総研理事 瀬戸政宏は、産総研が全国の公設試とも連携していることを紹介し、「産総研は NO と言わないネットワークを構築しています。ありません、知りません、できません、と言いません。ぜひ、産総研のチーム“東北”へコンタクトしてください」と述べました。後半は、産総研、東北 6 県公設試、活性研、東経連から計 74 件のポスターセッションを行い、ポスター展示者と来場者との質疑応答が活発に行われました。本フェスタをきっかけとして、産総研の技術シーズが、東北で花を咲かせることが期待されます。

NO と言わない産総研を、ぜひ、ご活用ください。



東北歴史博物館で工芸指導所関連の特別展開催 - 美しさは普段づかいの中に -

東北歴史博物館（宮城県多賀城市）で、平成 28 年度冬季特別展「工芸継承—現在から捉え直す国立工芸指導所—」が平成 29 年 1 月 14 日から 2 月 26 日の会期で開催されました。工芸指導所は産総研東北センターの前身にあたります。1 月 14 日に行われた開会式では、産総研理事長 中鉢良治が祝辞を申し上げます。

中鉢は祝辞のなかで、「工芸品の良さは素地の美しさや、使えば使うほど味が出て来ることにあります。美しさは普段づかいの中にあるものだと思います」と述べました。工芸指導所が目指したのも、伝統技術に新技術を組み合わせた実用のための工芸品づくりでした。

工芸指導所は昭和 3 年、仙台市二十人町通（現：宮城野区五輪）に設置され、日本初のデザイン研究機関として、工芸品の海外輸出の推進と東北地方の産業振興を目指しました。昭和 8 年には、独自の色合いを持つ漆の塗装法「玉虫塗」が発明されました。戦後、産業工芸試験所東北支所として活動を続けましたが、高度経済成長期を経て、昭和 42 年に、東北工業技術試験所へ改組され、現在の産総研東北センターにいらっています。そのため、産総研東北センターでは、長らく、工芸指導所の試作品を保存していました。しかし、東日本大震災後、より良い環境で保存するとともに、より多くの方々にご覧いただくことが、先人の偉業を後世に伝えることに役立つと考えました。そこで、平成 26 年 12 月に、工芸品の専門家である元東北工業大学教授の庄司晃子先生からのご紹介により東北歴史博物館に収蔵いただくことができました。

産総研東北センターも、工芸指導所の目指した「実用のための工芸」の継承に寄与しています。

昨年、仙台市で開催された G7 財務相・中央銀行総裁会議では、「玉虫塗 ワインカップペア」が記念品として採用されました。玉虫塗を傷つきにくくする保護膜には、産総研東北センターで開発された粘土を主成分とする膜材料「クレースト®」の技術が使われています。食洗機にも耐えるコーティングを施すことで、諸外国の幅広い生活様式でも玉虫塗食器を“普段づかい”いただけるようになりました。

東北工業試験所へ改組後 50 年となる本年、このような特別展を開催いただけたことは、私たちにとっても大変よろこばしい記念となりました。



祝辞を述べる中鉢理事長。背景は、昭和 8 年ドイツ人建築家ブルーノ・タウトが来日した際の集合写真。



玉虫塗パフ入れ。



特別展に際し行われた展示ワークショップでは、高校生らが「玉虫塗」を当時の方法で再現しました。



G7 財務相・中央銀行総裁会議の記念品となった玉虫塗のワインカップペア（(株)東北工芸製作所製作）。耐久性の向上だけでなく、普段づかいでも玉虫塗の艶やかな光沢と華やかな色調を保ちます。

連携主幹の紹介



連携主幹

後藤 浩平

Kohei Goto

連携主幹

増田 善雄

Yoshio Masuda

今年度、東北センターの連携担当には、新たに2名の連携主幹が加わりました。4月に加わった増田善雄連携主幹、10月に加わった後藤浩平連携主幹とともに東北出身で、「花の(!?)平成元年入所組」の同期でもあります。連携主幹は、イノベーションコーディネータと協力するなどし、連携活動や成果活用に携わっています。

東北のみならずと全国の産総研研究者をつなぎ、課題解決のお手伝いをいたします。ぜひお気軽にご相談ください!

増田 善雄

私は、宮城県仙台市で生まれ育ち、1989年(つまり平成元年)に当時の東北工業技術試験所に入所しました。以来、苦竹(仙台市宮城野区)の地で一貫して研究業務に携わり、主に数値解析の研究をしていました。2016年4月に連携主幹となつてからは、連携活動(特に秋田県、岩手県を担当)と産業技術連携推進会議(産技連)の補助などを担当しています。まだ慣れないことも多いですが、様々な経験ができ研究者時代とは違う面白さを感じております。

連携活動の基本は、様々な人とお話し話をすることです。この1年弱の間に、東北各県の公設試や地元企業の方々と多くの出会いがありました。10月に開催された産総研テクノブリッジフェア in つくばには東北6県の公設試所長の皆様をご招待いたしました。産総研の7領域に渡る広範な技術シーズを売り込む立場として、上司や同僚の協力を得ながら準備を進めました。各県公設試所長の皆様に産総研の技術シーズを知っていただくとともに、私自身のネットワークも広がり、信頼を得られたような気がして、その後のイベントへとつながっていきました。

12月には中鉢理事長とともに、秋田県知事を訪問し、また秋田県産業技術センター及び地元企業3社にも訪問しました。訪問先の企業から直後に連絡をいただき、共同で開発した製品の新たな展開について相談を受けました。

1月に仙台で開催された「オンリーワン企業-次世代産業技術マッチングフェスタ」では訪問した企業、各公設試の皆様からもご支援を頂戴し、イベントを成功させることができました。

今後とも生まれ育った東北のお役に立ちたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

後藤 浩平

昨年10月につくばセンターから着任致しました。出身は岩手県の天文台のある街で、学生時代から就職後まで永らく札幌で過ごしました。東日本大震災直後につくばへ異動し、今回の異動で曲がりくねったJターンをしてきた事になります。

東北地域の企業様とのお付き合いは、前任地で技術相談や中小企業連携の部署に所属した折に、震災復興の研究助成への申請や産総研の被災地向け技術支援事業の立ち上げ等で間接的に始まりました。また、札幌時代に産総研がベンチャー創業による技術の事業化を始めた頃に、創業支援の各機関、とりわけ東北地域のインキュベーションマネージャの皆様ともお付き合い頂く機会がありました。

研究者時代の専門は有機機能性材料でしたが、産学官連携担当に転じた際に、40の手習いよろしく所謂MBAコースで新規事業開発や起業について学びました。実際に起業したわけでは無いので畳の上の水練かもしれませんが、研究者時代よりも広い観点から地域企業の技術開発のお手伝い出来ればと思っています。既に数十件の技術相談などを行い、中には企業訪問に同行した研究者のアドバイスがお役に立ち感謝されるなど、連携活動のやりがいも感じ始めているところです。

今後は人口減少やグローバル化もあり特徴的商品の開発競争も激しくなる中、新たな公的事業を企業の皆様に紹介しつつ、ご縁を大切にしてお役に立てるよう機会を生かせれば幸いです。

連携と技術相談

技術開発や製品開発の過程で生じた「どこに問題があるの?」「どう改良したらいいのだろうか?」など技術的課題でお困りの方、産総研との連携を検討されている方は、お気軽にご連絡ください。

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 東北センター 産学官連携推進室 ☎ 022-237-5218

東北センターからのお知らせ

産総研東北センターでは、テクノブリッジ活動をはじめ、産総研の新技术を公設試の関連技術とともに紹介する「産総研・新技术セミナー」や、東北地域の研究開発型企業を公設試とともに訪問し技術相談や情報交換を行う「東北コラボ 100 事業」などを行い、東北地域企業の事業強化や事業拡大の支援に努めています。

MathAM-OIL 第1回企業連携ワークショップ開催

平成29年1月25日、TKP ガーデンシティ PREMIUM 神保町（東京都千代田区）にて、MathAM-OIL 第1回企業連携ワークショップを開催いたしました。当日は、82名の方にご参加いただきました。

MathAM-OIL は、平成28年6月30日に東北大学に設置された連携研究サイト「産総研・東北大 数理先端材料モデリングオープンイノベーションラボラトリー」の略称です。「数理マテリアルインフォマティクス」を強力な柱として、超先端材料設計を促進し、新たな市場の創設を目指す研究開発を行っています。

本ワークショップでは、株式会社村田製作所 馬場康行エキスパート、及び東北大学原子分子材料科学高等研究機構 折茂慎一教授に特別講演いただいた後、MathAM-OIL 所属の各研究員より、研究課題に関する話題提供を行いました。

第2回以降の開催も予定しておりますので、ご興味のある方は、ぜひご参加ください。



表彰

平成28年10月6日、東北センター所長 松田宏雄が国際標準化活動推進への長年にわたる貢献について「工業標準化事業表彰（経済産業大臣表彰）」を受賞しました。

また、平成28年5月27日、化学プロセス研究部門有機物質変換グループ 山口有朋（現在、経済産業省へ研修出向中）が、『リグニンの有用化学物質への変換技術の確立』で公益社団法人・新科学技術推進協会より2016年新化学研究奨励賞ステップアップ賞を受賞しました。



東北センター所長 松田 宏雄



化学プロセス研究部門 山口 有朋